

# LW受容協力医師制度の展望

ルポ——「常に患者の側に立つ」を深く胸に刻み、

## 地域・在宅医療を支える鈴木悦朗医師(63歳)の奮闘

薬剤師から「医師への道」を選んだ時から一貫して変わらない「患者ファースト」の精神。横浜・日横クリニックで地域と連携し、ますます進行する高齢化の波に立ち向かう。



東横線日吉駅近くの商店街の中にクリニックはある。学生が多い街だ

「看取り」は何も高齢者ばかりではない。若い患者の最期に寄り添うこともある。鈴木悦朗医師にとって、深く胸に刻まれた忘れられない一つのケースがあった。

S夫さん、38歳。病院から訪問診療を頼まれて、その自宅を訪ねた時だった。薄暗い部屋の中で目だけギラギラとさせ、苦痛の表情を浮かべて介護用ベッドに横になっていた。胃がん末期だったS夫さんは「一つの頼み」を口にする。「一番下の3番目の子どもが1歳になるのを見届けたい」。

全身の浮腫と腹水、陰嚢水腫で陰嚢は通常の十倍以上の大きさで念発起する。3年半勤めた病院を辞め、医師を目指し、猛勉強を始めた。

「格差や、現状への不満」に対する強いバネがあったんですね」と水を向けると、「バネというか、薬剤師になってみて、強烈な意志が生まれたんだと思います。当時ですが、医師は患者のほうを向いていないで、出てきた大学や上のほうばかり向いているというような印象でしたから」と振り返る。

1年半後、佐賀医科大学(現佐賀大学医学部)に合格。幼い子ども2人を抱え、妻とともに、生まれ育った横浜から遠く離れた九州での生活が始まる。家庭教師と薬剤師のアルバイトを6年間続け、卒業。「鈴木医師」が誕生する。とはいえず、薬にはならない。卒業後、横浜に戻り研修医になったが、当時の研修医の給料は少なく、あちこちの病院の当直をして生活費を賄う日々だったという。

「先生は薬剤師でもあるので、処方される薬が安心なんです」「医学の最新情報やジェネリック医薬品情報にも詳しいし、何よりも勉

に膨れ上がっていた。医師から半ば見放され、医療不信のような状態に陥っていたS夫さんに、鈴木医師は言った。

「あなたの病気は治せないけれど、今のような状態は必ず改善させます」

「『あなたの病気は治せない』と正面から言うのは、医師としてそういう勇気が要ることですよ」と問うと、鈴木医師は「そうですね、彼は医療不信に陥っていましたから、まずその不信を取り除いてやるのが大事だと思いましたが」と言う。アルブミンを注入することで利尿をはかったりし、腹

水と陰嚢水腫を改善させた。改善させたことで、ようやくS夫さんと普通に会話ができるようになり、表情にも少し笑顔が戻ったという。看護師でもある彼の妻の献身的な介護も大きな支えとなった。

原病を治すことはできなくても苦痛を緩和することはできる。そうすれば本人や家族の『生活の質』を向上させることができる——。「患者や家族に寄り添うということとは、こういうことなんだ」と、そのとき強く感じたという。鈴木医師に看取られて、S夫さんは亡くなった。子どもが1歳になる数

強家だと思えます」と今、そんな患者さんの声が寄せられる。

### 協会の「不治かつ末期」の患者への対応に共感

東急東横線の日吉駅。慶応大学の近くに日横クリニックがある。

駅から歩いて1分ほどの繁華街のビルの2階と3階。23年前に開業して、その3年後に3階に訪問看護ステーションを設立。在宅医療のさらなる充実に向けて大きく踏み出した。ここ数年、在宅での看取りは年に20〜30人。次第に増えてきているという。当初から、専門医というよりプライマリケアや在宅医療に力を入れてきた鈴木医師は、「地域の病院や診療所、介護施設と連携して、今後ますます進行する高齢化の波をなんとか乗り越えていきたい」と熱く語る。

日前だった。

### 薬剤師になって芽生えた「医師」への強烈な意志

「これほど敷居を感じさせない主治医はいないのではないか。かかりつけ医はどうあるべきかを鈴木先生は示している」と、仲間の医師の間での評価も高い。

そんな鈴木医師の「医師への道」は決して平坦ではなかった。高校を出て薬科大に入学し、卒業後は病院に薬剤師として勤めた。しかし、そこにあったのは、看護師の下請けのような仕事や、医師と薬剤師の「格差」だったという。一

日横クリニックは、理念の1つに「患者および利用者のニーズを正確に捉え、そのニーズを具現化する努力を惜しまない」と掲げている。この「患者ファースト」の精神は、薬剤師から医師の道を選んだ時から、一貫して変わらない。「常に患者の側に立つ」というのが、医師を目指した時からの強い思いで、その初心を忘れないように掲げてるんです。掲げてやっつけていかないと、どうしてもダラけてしまうでしょ。ダラケれば、スタッフにもわかりますから。掲げることで、自分を奮い立たせているんです」

2年前、あるケアマネジャーとの縁で、尊厳死協会の受容協力医師に登録した。「不治かつ末期」の患者への対応に共感したからという。終末期の患者の意思を、家族も交えて正確に捉え、本人の意思が尊重されるような最期を迎えさせてあげたい——。終末期患者の心に寄り添う「患者ファースト」の理念は、揺るがない。



パソコンに向かう鈴木悦朗・日横クリニック院長。柔和な印象だが「視野の広さと鋭い洞察力がある」と医師仲間から見ている